



## 自然環境保全と「人と自然の共生」

東京大学名誉教授 岩槻邦男

一時代前に、自然保護という言葉が広く使われたことがあった。nature conservation をそのまま日本語に置き換えたものだったが、この欧文脈の熟語が大手を振って日本を跋扈していたのも、日本人の欧米崇拜の念に基づくものだったのだろうか。しかし、考えてみると、人が自然を保護する、などとずいぶんおこがましい表現をしたものである。自然破壊は人の営為であったとしても、人は自然を保護するだけの實力を持ち合わせているとは、伝統的な日本人の考え方には馴染まない。

確かにこの言葉、一時期の自然との交流の考え方を育てるのに、内容はきっちり詰めないままだったとしても、一定の役割を果たしたものではあった。しかし、最近のように人と自然の関係性がより進んだかたちで整えられるようになってくると、この言葉は不要になったともいえよう。現に、環境省でも、昔あった自然保護局は、少し前の省庁改変の際に、自然環境局と改称されている。

自然保護という言葉で表現されてきた自然とのつきあい方は、今では自然環境保全などといわれる。ここはその全貌を詳細に論じる場ではない。望ましい環境保全のためには「持続的な利用」という言葉を現実のものに育てることができる「人と自然の共生」を演出しなければならないのだが、この言葉、西欧の人にはなかなか理解の難しい日本的発想であることを考察し、日本人が実行することによって地球全体に向けてこの概念を発信することを考えてみたい。

### 生命系の生を生きる

『生命系—生物多様性の新しい考え—』（1999, 岩波書店）を上梓してからだいぶ時間がたった。ここでは、人は自分の生を個体としての生で考えるのがふつうであるが、生命体としては、60兆を

数えるという細胞のひとつひとつにすでに1組の遺伝情報を備えている事実を想起し、かといって、多細胞の個体の階級でも生を完結することなどできず、地球上のすべての生き物を連ねてはじめてひとつの生（生命系の生）を生きることができるのだ、と整理した。

ここでいう生命系という言葉（概念）は英語にはないものだから、この書で spherophylon という造語を提示し、最初はストックホルムで開催されたシンポジウムで紹介したが、この言葉を説明する総説は日本学士院紀要で公表した（Proc. Japan Acad. Ser.B, 82: 270-277. 2006）。

西欧文明による理解では、人は万物の霊長であり、他の生き物とは異なった存在であるとする。この考え方は、聖書の創世記では、6日目に創られた人間がすべての生き物を支配するものとされたことによる。幼い頃から聖書こそが書物であるとして育ってきた人たちと、自然界の実体であるとされる八百万の神信仰を脳裏に焼き付けられて育ってきた者との間の差は理屈で埋められるようなものではないかもしれない。

生物学の観点からすれば、生き物は地球上では30数億年前に単一の型で発生し、長い進化の歴史をへて、現在見る多様なすがたを創り出した。膨大な数の種に分化したとはいえ、どの種を取り上げても、単一の種で生きていけるものはなく、かならず他の種と直接的間接的な関係性を持ちあっていて、地球上に生きているすべての生き物は（種の階級でも、個体の階級でも、いうまでもなく細胞の階級でも、）相互の関係性を保ちあうことがなければ生を維持することなど期待ができない存在である。

この関係性を、30数億年の進化の歴史を語る系統（phylon）と、地球上の生物の関係性が演じられ

る生物圏（biosphere）をつなぎあわせた spherophylon という言葉で表現しようというのが、生命系の英語訳を造語した根拠だった。

### いのちの繋がりを考える

真核生物の進化には細胞内共生によるミトコンドリアや葉緑体の新生が確認され、原生生物段階では二次細胞共生が見られて、進化の過程で系統間の交流が見られると確かめられるようになった。こうなると、生物の系統は単純に二分岐の積み重ねで描き出されるものでない。さらに、有性生殖を確立して種の進化の速度を加速してからは、元来のすがたである同種の個体間だけで営まれるべき有性生殖に加えて、踏み外しのような現象である異種間の交雑にも後継世代を創り出す事例が生じるようになった。ある分類群では、異種間の交雑が頻繁に生じ、これに染色体突然変異（たとえば倍数化、無融合生殖の導入など）が加わって、網状進化と呼ばれることになった多様化も見られることが知られてきた。系統の間に遺伝子の交流が見られることはしばしばで、単一の型から出発した地球上の生き物は、相互に親戚関係にあるだけでなく、進化の過程でしばしば遺伝子の再交流を成し遂げていたという事実を知ることになったのである。何のことはない、生命系の生を考えると、地球上の生き物がすべて遺伝子を共有し、すべての個体、種が一体とならなければひとつの単位として生を完結したことにはならないという事実を突きつけるものなのである。いのちの繋がりは、生き物の進化を通じて、反復確かめられてきた事実なのである。

### 人と自然の共生

もともと人は自然界を構成する1要素としてその進化を展開してきた。知的な生き物として、他の種とは異なった特殊な能力を創造してはきたが、多様な生物のひとつであるという事実に変更はないし、他の生物なしにヒトという種単独で生を持続できるほど賢い存在ではない。そのことを、日本人は伝統的に意識していたので、これだけ欧米文明に飼いならされている現在でも、人と自然の共生という表現をすんなり理解することができ

る。しかし、この言葉、harmonious co-existence between nature and mankind と英語に置き換えても、置き換えればなおさらかもしれないが、なかなか欧米の人たちにはストンと理解してもらえないことがない。

考えてみれば、人と自然の共生という概念は、人が万物の霊長であり、自然を持続的に利用し、破壊から自然保護をする、という西欧的な発想とは馴染まないものである。

伝統的な日本人は、人為を自然の反対語と理解するようなことをせず、人と自然が共生する生き方を、相対することにもなる自然と人為との緩衝地帯にもなる里山をつくるような開発によって見事に演出してきた。一方、西欧では、natural の反対語は artificial である。これは、アフリカからユーラシア大陸に移住してきた先祖たちが、まず中東に茂っていたレバノン杉などを伐開し、いわゆる自然破壊を最初の活動で示したあたりから、現実だったことかもしれない。森を絨毯的に開発し、戦の時に完全に焼き払うような攻撃を平気でやることは、伝統的な日本人の好むところではなかった、少なくとも、八百万の神よりも資源・エネルギー志向の生き方に傾倒するようになるまでは。

この違いを、西欧的なものとアジア的なものという対立で理解しようとするとうまくいかない危険性がある。中国でも、自然の産物は人間の財産であると見なされてきたし、戦の際に森林を焼き払う行為は三国志の昔から平気で行われてきた。他民族を壊滅させるためには社稷を抹殺することが必要でさえあった。敗者を支配下に置く戦争の進め方は、むしろローマ帝国の手法に日本とよく似た展開を見ることである。

自然の諸事物に神のすがたを見、だからこそあらゆる物体を勿体ないと崇敬する日本的なものの見方こそが、人と自然の共生を演じ、自然物の持続的利用を可能にする。右肩上がりの成長を期待して、万物の霊長に従属するものとみなす自然物を、消費は美德、などとうそぶきながら濫費していたのでは、地球の持続性などあり得ないことだろう。その現実を、わたしたちは日本の歴史が演出してきた成功譚として認識し、世界に発信し、継続発展させるべきだろう。